

## くらしをうつつて

書と向き合う日々の中で感じるさまざまなこと——古の人々の心、悠久の表現の営み、現代のくらしとのつながりを綴る連載エッセイ。

木下 真理子 (書家)



小泉八雲の虫籠(日輪、舟形) 小泉八雲記念館蔵

## 風、香り、音をきく

ジリジリと肌を刺す日差し、かまびすしい蝉の声。夏がこんなにも猛暑でなかったとはいえず、打ち水や浴衣、風鈴など、涼をとるために昔の人はさまざまな工夫を凝らしてきた。今のよう  
に「エコロジー」とわざわざ掲げることもない、心地いい暮らし。

風鈴は目に見えぬ風を「音色」に変える。

ある科学的な実験では、外国人は風鈴の音を聞くと、体温が上がるとか。一方、体感温度が下がる日本人にとってその音は、夏場に吹きこむ涼風の気配……。秋の夜に響きわたる虫の声も雑音と思う人はおそらくいない。

\*

香道の世界には「聞香<sup>もんこう</sup>」という言葉があった、「香」は「嗅ぐ」ものではなく「聞く」もの。かな香りに心を傾けて、想像を巡らせる。

「組香」と呼ばれる香席では、平安の頃に編

まれた『古今和歌集』や『源氏物語』などを題材に、テーマの雰囲気と香とを結びつけ、何種類かの香を聞いてゆく。例えば「桜香」では、ほんとうに桜のような香りがするのではなく、桜咲く情景を香に見立て、心中に描きながら、お題の香を聞き当てる。

想像というものが遊戯の境地であることを、先人たちは心得ていたにちがいない。

\*

聴くということでは、私にとって音楽も暮らしの中で、愉しみのひとつ。BGM的に流したり、鑑賞に浸ったり。特に音楽にときを委ねようと思えば、一曲目から曲順どおり、スキップもしないで聴いてゆく。

ヘッドホンを装着し、目を閉じ、まず一呼吸。意識を集中して、録音された場の空気や演奏者の熱量が奏でる響きを感じとろうとする。

スピーカーの前で聴く際は、ラグを持ち出して床に敷き、音場を整える。

音は空気という、粒子の集合の振動で、空間を伝播してゆく波動なのだから、上質なヴァイブレーションを、耳だけではなく全身で浴びるように感じたい。

\* 澄んだ声が印象的なケルト・ミュージックは、心身ともに癒してくれる。古代・中世のケルト・ミュージックを現代に甦らせることをコンセプトにした「アヌーナ」という男女混声の合唱団があつて、その木霊こだまのような歌声を聴くと、森の泉に触れている心地がする。

重要なのは、お互いの息遣いを感じながら、阿吽の呼吸で歌に入ること、そして、合唱全体の一休感だ。誰か一人の声が際立ってしまつたり支配的だつたりしてはならない。このグループでは、一人が全員であり、全員が一人なんだ。

アルバム『レヴェレーション』のライナーノ

に生まれ、二歳のときにギリシャからアイルランドに移住。十九歳で渡米して、後に新聞記者となり、西インド諸島での島暮らしを経て、明治二十三年に四十歳で来日する。「耳なし芳一」「雪女」などの怪談が有名で、随筆家、日本の研究家、英文学者としても活躍した人。

来日して数か月、八雲は教師として赴任した松江で暮らしはじめた。鳥根県には八百万の神が集う出雲大社がある。帰化して名乗った「八雲」の名もこの地に因んでいららしい。

来日の動機については『古事記』にあるとの説もあり、自然に宿る神霊に日本人が深く共鳴していたことを、現存最古の日本の歴史書に感じとつたのかもしれない。

\* 八雲はことのほか、虫を愛でたことでも知られている。

もっとも江戸の頃には「虫売り」の商いが成り立っていたように、かつて日本では虫の音色

ーツ(著・松山晋也)で、リーダーのマイケル・マクゲリンはそう語っている。

同アルバムには日本の楽曲「もののけ姫」と「さくら」も収録されていて、その音像世界に没入してゆくと、日本人が失っていた遠い昔の記憶が蘇ってくるかのような錯覚を覚える。

古より、ケルト人は口頭伝承によって物語や歴史を受け継いできたと言われている。自然を崇拜し、精霊の宿りを信じて耳を傾けてきた、そんな「ケルト」の源泉は、今もアイルランドやスコットランドの人々の胸の奥に流れている。そして、このような民族的な感性とでもいうものが、太古の日本と共通すると指摘されることもある。

### 八雲が愛でたもの

それで思い出されるのは、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)のこと。

アイルランド出身の父とギリシャ人の母の間

を鑑賞するという風流な慣習があつた。桜や梅を見物するように、秋に音連れる虫の音を求めていたことが、詩歌に残されている。

八雲による虫の音の記述も情緒的かつ細微。

〔略〕いつも日が沈む時分になると彼の極めて小さな魂が目覚めます。そうなると部屋中にえも言われぬ美しさを湛えた繊細で神秘的な音楽が広がりはじめ。極端に小さな電鈴ベルの響きとでも言おうか、細く、かほそく銀しろがねのすずしい音色で震え波立つ調べを響かせる。

〔草ひばり〕Kusa-Hibari 訳・森亮)

それにしてもその聴覚の鋭さには驚かされる。実は、八雲は学生時代に友人と遊戯中、左目を失明した。そのうえ右目の視力も弱く、このような事情が影響していると思われる。

ただ、虫を愛でていたのは、その音色の美しさだけではなく、一寸の虫にも五分の魂があるということにも心を寄せていたようだ。

扉の写真は八雲が愛用した虫籠。先の随筆では、籠の中で繰り広げられる幻想的な生命の息吹についてこう綴っている。

〔略〕その声は私の気ままな慰みに、あたかも神の恵みにすぎるように頼っている一つの

\*「暮らしをうつして」は隔月連載です。  
次回は12月号に掲載予定。



小さな生き物のあることを告げていたし、小さな籠にひそむ大霊の分子と私の中にある大霊の分子とが共に実在の無量海むりょうかいの深みでは常に同じ一つのものであることを告げていた〔略〕。

\* 寢床での読書も、私の好きな過ごし方。

いつもは灯りが外に漏れないようにと雨戸を閉めて、真夜中まで読みふけてしまう。

でも、夏の終わりから秋にかけては、これに優る愉しみがある。

開けたままの窓からは、カーテンをゆらす清涼な風に乗り、外で唱和する虫たちの声が部屋に入ってくる。床に腰を沈め、地球の重力に逆らわず横になって、誘われるまま瞼を閉じる。

音は心と結びつく。夢かうつつか、いつしか私の身体は、無限に広がる星空の下で草原と同化して、歌う草ひばりや鈴虫たちと呼応し、無量海に包まれている。

## 茶会記・消息

### 玉林会

七月二十八日、大徳寺山内の玉林院では、同院担当で釜が懸けられた。

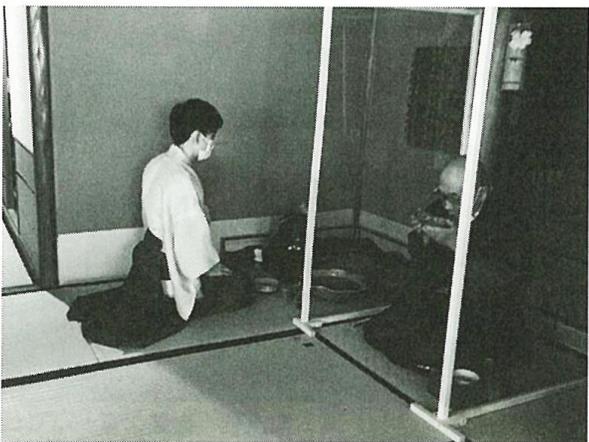
コロナ禍のなか、同院では三月よりインターネットによる事前予約制を導入。席内にもアクリル板を設置するなど、感染防止対策を整え準備していた。緊急事態宣言発令によって、四月から六月は休会となったが、当月はようやくの開催となり、各回定員に達し、盛会であった。



床

待合掛物 寺什 美人夕涼之図  
本席掛物 泰堂和尚筆 夏雲多奇峯  
即中齋箱

花入 竹一重切 銘聴蟬  
花 祇園守、弟切草、縞葦  
香合 紀吹上濱簾貝 金森得水箱  
七宝段紹巴シキテ 友湖作  
風炉、釜 寺什  
風炉先 玉林院古材 波連子  
川本光春作  
水指 信楽 蓮ノ葉 平 楽入作



玉林会

新古美術・御茶道具



北川昭雲堂

陳列場 阪急百貨店7階古美術ギャラリー  
電話 06(6313)7617

<http://muann.net>

茶の湯道具一式



龍善堂

京都・四条河原町西入ル  
電075(221)2677

東京店 銀座五丁目八の五  
電03(3571)4321

